

審査の結果の要旨

氏名 脇本健弘

受験者の博士論文は、初任教師を対象とした先輩教師による授業のメンタリング行為の支援に関する研究である。ここでいう授業のメンタリングとは、「初任教員の授業力を高めること」を目的とした「熟達教員―初任教員間の発達支援関係 (OJT)」を意味する。具体的には、熟達教員が初任教員の授業を観察し、授業終了後に、それに関する討議を両者間で行うことをいう。授業力を高めるためには、こうした観察と討議を繰り返していくことが求められる。

近年、団塊世代の大量退職、それに伴う大量採用により若手教師の割合が、首都圏を中心に大幅に増加している。この動きは、今後 10 年をめぐりに日本全国に広がると言われており、それに対する対処が各都道府県で本格化しつつある。しかし、若手教師の育成をめぐる環境はあまり良好とはいえない。校務の多忙化・校内の年齢構成に歪みが生じていることから、現場における教師育成は機能不全を起こしている。一方、学校をめぐる社会の目は格段に厳しいものとなっている。かつて学校が相対していなかった教育問題が噴出し、保護者の要求も高まっている。このような環境下においては、経験の浅い教員が一刻も早く授業力を高め、熟達することが求められる。

そこで、本研究では初任教師の育成方法としてメンタリング（熟練教員―経験の浅い教員による垂直的な発達支援）に注目し、ICT を活用したシステム **FRICA・Listena** を開発し、先輩教師のメンタリング行為の支援を試みた。**FRICA・Listena** はタブレット PC を利用したシステムであり、子どもや初任教師の課題や悩みを撮影し、振り返りを支援する。システムの検証は教育の現場において、熟達教員と初任教員にこれらのシステムを一定期間用いてもらい、評価を行うことにした。評価の結果、**FRICA** は先輩教師の視点によるメンタリング行為を、**Listena** は初任教師の課題や悩みに焦点化したメンタリング行為を支援することに有効性があることがわかった。また、**FRICA・Listena** の両者を活用した実践を分析することで、両システムを学校現場で実際に有効に活用する方法として、(1) **FRICA・Listena** を併用する方法と、(2) **FRICA・Listena** の機能を組み合わせた新たなシステムを活用する方法を提案した。教師育成に ICT 技術を役立てる視点は、先行研究がそう多いわけではなく、極めて高い独自性が認められる。特に、現場での実践を通して、メンタリング支援システムを評価する本研究の視角は、今後の教師教育研究に一石を投じるものになると思われる。

しかし、本研究には残された課題も少なくない。審査に当たった教員からは、1)システムに関する評価は行われているものの、記述密度が粗い。システムを導入して学校現場に起こった出来事をよりミクロに描写していく必要があることや、2)メンタリング支援を考察する際にリファーする分野として、教育工学以外の研究領域に関する目配りが不足している

ことなどが指摘された。また、3)個別の研究に関する議論は詳細に行われているものの、学問領域に対する理論的貢献をもう少し記述を詳細にできるのではないかといった意見や、4)本研究の知見を、教育現場の実状に照らしつつ、活かしていく視点がやや不足しているという指摘、さらには、5)メンタリングが着目される以前の教師教育の歴史的経緯（特に公教育の成り立ちについて我が国における成立までの歴史的経緯）についての目配りが足りないというコメントもなされた。最終審査会では、これらの視点に対して活発な質疑応答がなされた。

しかし、これらの諸課題は存在するものの、論文全体としては構成・内容ともによく出来ており、諸課題に関しては、受験者が、今後の研究において真摯に向き合い、十分探索可能であると考えて、審査員満場一致にて、本論文を博士（学際情報学）の学位請求論文に値すると認めた。